

小学校 「道徳科」 評価ブック

気になる評価について
まとめました

「みんなのどうとく」編集委員会：編



平成30年(2018年)4月から
「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」(道徳科)になります

学研
教育みらい

“考え、議論する道徳”への意欲は 評価から

道徳は自分の生き方に関わることです。児童が道徳の授業に意欲的に取り組むようになれば、日常の行動により変化をもたらす効果が期待されます。そのためには、児童が学習に意欲的になる方法を考えることが必要です。なかでも大きな影響を及ぼすのは指導方法と評価でしょう。

道徳的価値に関わって考える姿や価値に基づいたその児童なりの行動を、どう捉えるか。そこが「道徳の評価」最大のポイントです。

この冊子では、文部科学省が設置した「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」による報告（平成28年7月）に基づき解説しています。



もくじ

「特別の教科 道徳」の評価 基礎知識編……………2

教科化の背景……………2

学校の教育活動全体の評価と「道徳科」の評価の関係……………3

「道徳科」の評価の構造……………4

学校現場での道徳教育に予想される影響……………4

学習指導要領の方向性と指導方法の質的改善……………5

「特別の教科 道徳」の評価 実践編……………6

「道徳科」の評価の在り方……………6

道徳の評価と指導方法の全体像……………7

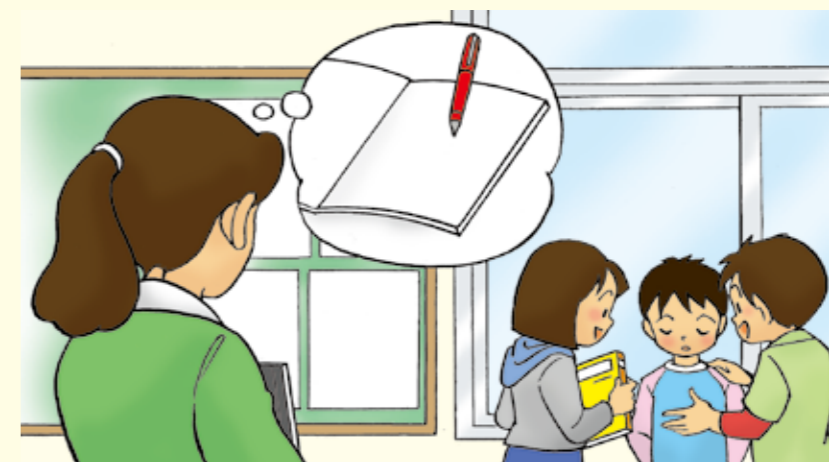
特別支援教育における道徳の評価……………7

評価手法について……………8

効果的な道徳の評価ツール……………9

「道徳科」の見取りについて……………10

道徳教育の評価 年間サイクル（例）……………12



「特別の教科 道徳」の評価 基礎知識編

文部科学省に設置されていた「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」から、平成28年7月22日に『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）が出されました。学習指導要領（平成27年一部改正版）が告示された後に審議が本格化され、一年後ようやく発表となりました。実に一年間を費やし、熟慮を重ねた結論と言えるものです。学習指導要領に示された指導方法の改善に対応する「評価」はどうあるべきか、難しい議論でした。

ここでは、その骨子と日々の教育活動に影響する事柄について、わかりやすく解説します。

教科化の背景

学校や児童の実態に応じた重点をもった指導を計画的に充実させて実践を深めた学校がある一方で、道徳教育自体の忌避、他教科に比べた軽視、主題*が不明確な生活経験の話し合いや読み物の登場人物の心情の読み取りに終始する指導、学習指導要領の内容（指導価値）をそのままなぞるような指導が見られました。

*主題……道徳的価値に係るねらいに、児童の実態、教材の特徴と活用を加味して設定する授業のねらい。

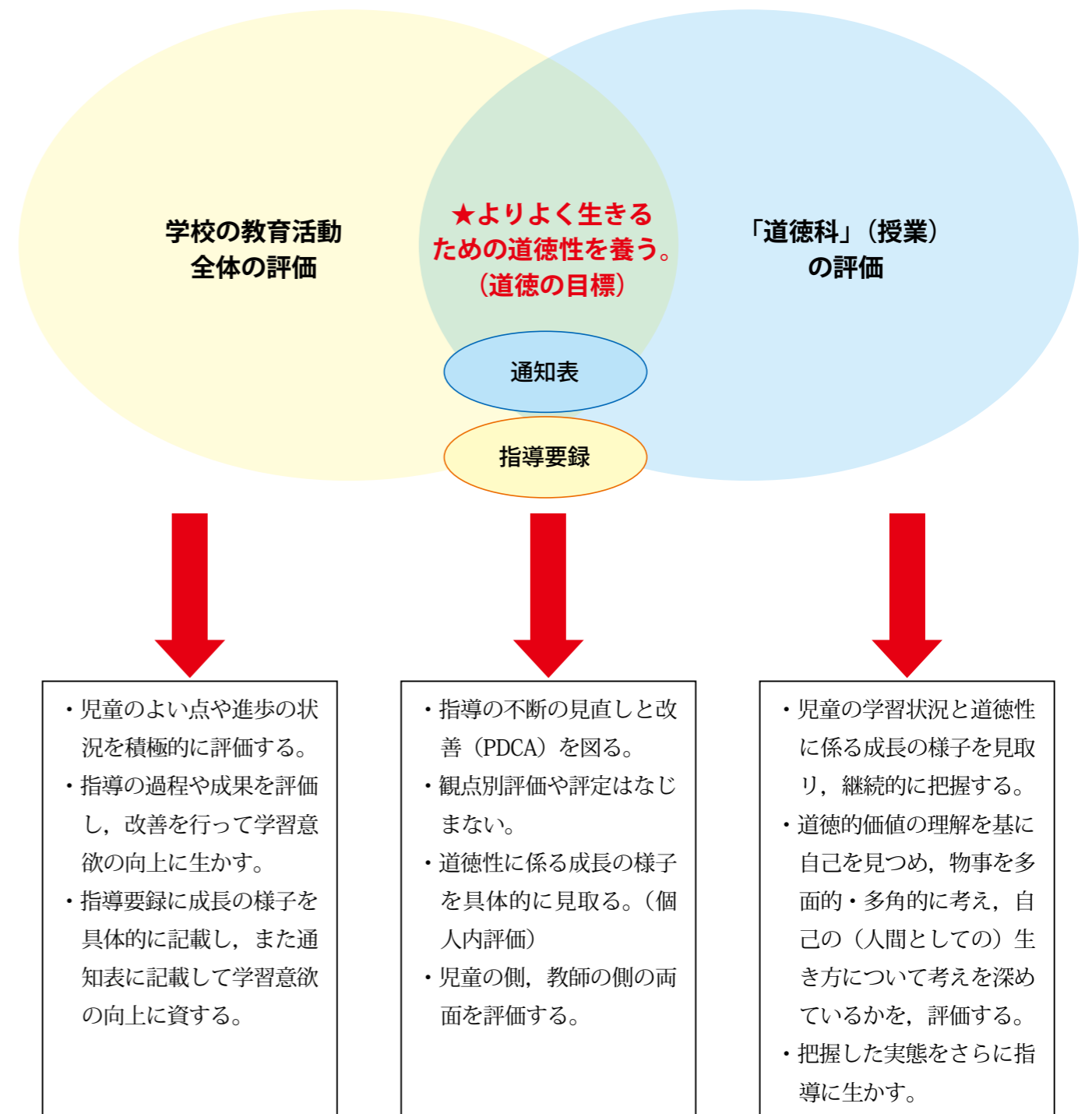


道徳教育の**実質化**と
質的転換を図る

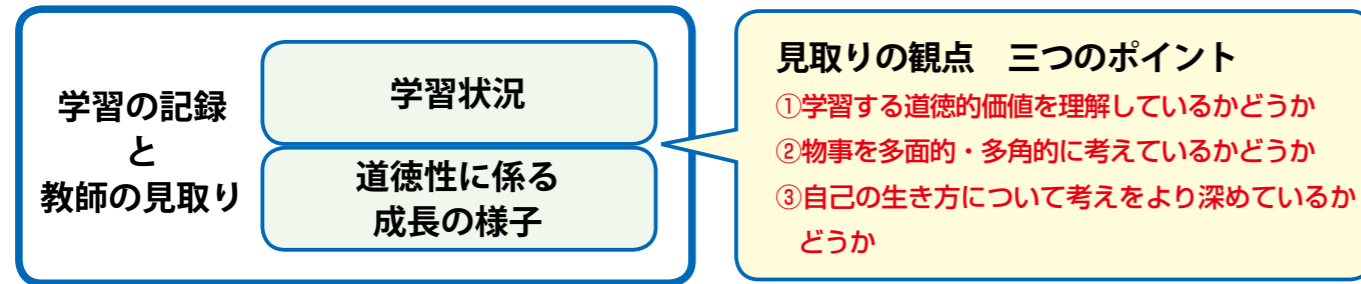
「道徳の時間」→「特別の教科 道徳」（「道徳科」）

	道徳の評価のこれまで	道徳の評価のこれから
学校の教育活動全体	児童のよい点や進歩の状況を積極的に評価。指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行って学習意欲の向上に生かす。 道徳性の評価 常時、児童の実態を把握して、指導に生かす。	具体的な方法は、継続課題。 児童の優れている点や長所、進歩の状況など、また、努力を要する点などについて評価する。その後の指導に配慮を必要とする点なども把握する。
「道徳科」の評価		児童側からは 、児童が自分の成長を実感でき、意欲の向上につながる評価であり、学習状況や道徳性に係る成長の様子を 継続的に把握 する。 教師の側からは 、目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための評価とする。

学校の教育活動全体の評価と「道徳科」の評価の関係



「道徳科」の評価の構造



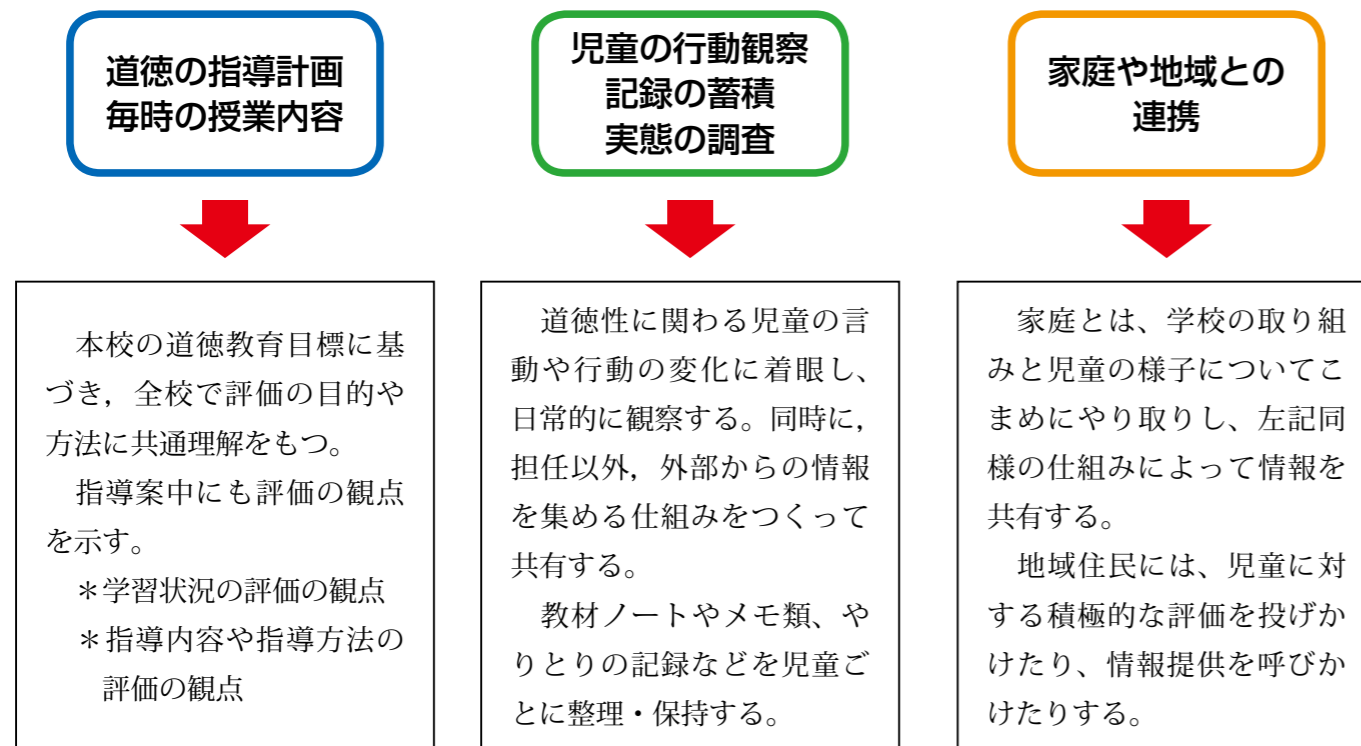
評価を行ううえでのポイントは、教育活動全体では、児童のよい点や進歩を積極的に捉えることにあります。一年間どのように指導してきたかを振り返ってその成果が表れているところに着眼します。そこから見取った事象を具体的に通知表や「指導要録」にどのように記載するかは、整理検討が続いていますが、基本線は学習意欲の向上にねらいがあります。

さて、「道徳科」の評価では、授業時間の「学習状況」と、道徳性に係る成長の様子の二点を見取ります。その観点（目の付け所）については、上図の通り三つのポイントが挙げられています。いずれにおいても、「自己（人間として）の生き方についての考えを深め」ているかどうかという点につながります。

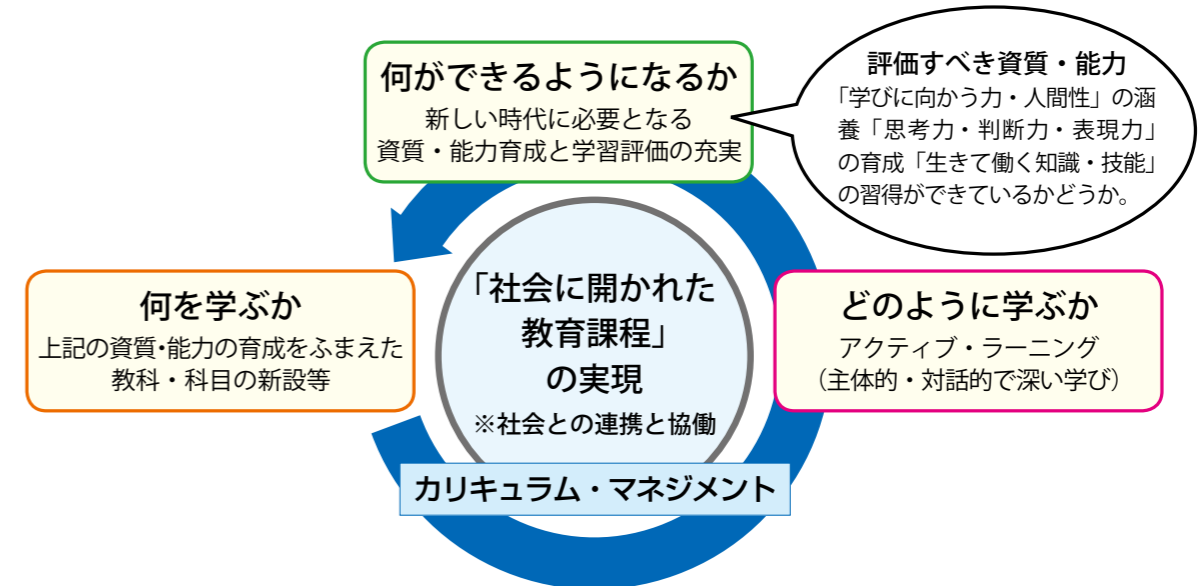
学校現場での道徳教育に予想される影響

評価といえば、学期末の（達成度評価）テストやミニテスト、授業などの取り組みの様子などを集約して、評定や観点別評価を通知表などに示し、数値や○×に表れない部分は「行動の記録」などに記述することでフォローに充てるとというのが主流であったと思われます。

そのような評価に慣れているなかで、先生方の取り組みに求められる「道徳の評価」にはどのようなことがあるのでしょうか。下記のように考えることができます。



学習指導要領の方向性と指導方法の質的改善



参考：中央教育審議会 教育課程部会 高等学校部会（平成28年6月）
資料6-1を元に作成

上の図は、次期学習指導要領の方向性として、「特別の教科 道徳」に限らない、学校教育全体で取り組む事柄を総合的に示しています。

日本の国土や国民・社会はもとより、それを取り巻く世界全体について今後の予測が困難な時代を迎えているので、新しい時代を生きる人間にとって必要となる資質・能力がどのようなものを明らかにして育成の目標としたのです。ポイントは、以下の四点です。

- ①予測困難な未来の課題を、乗り越えていくために必要な資質・能力を育てる教育が目指されている。
- ②資質・能力として次の三つが示され、道徳教育は、人間性に責任を有している。
 - ・「生きて働く知識・技能」
 - ・「思考力・判断力・表現力」
 - ・「学びに向かう力・人間性」
- ③資質・能力を育成するための教育が、何を、どのように学ぶかという形で示されている。外国語などの学習内容に加え、学習手法として**主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）**が提起されている。
- ④「道徳科」では、学習状況（どのように学んでいるか）と資質・能力の育成状況（子ども一人一人の心の成長の様子）を評価することになる。

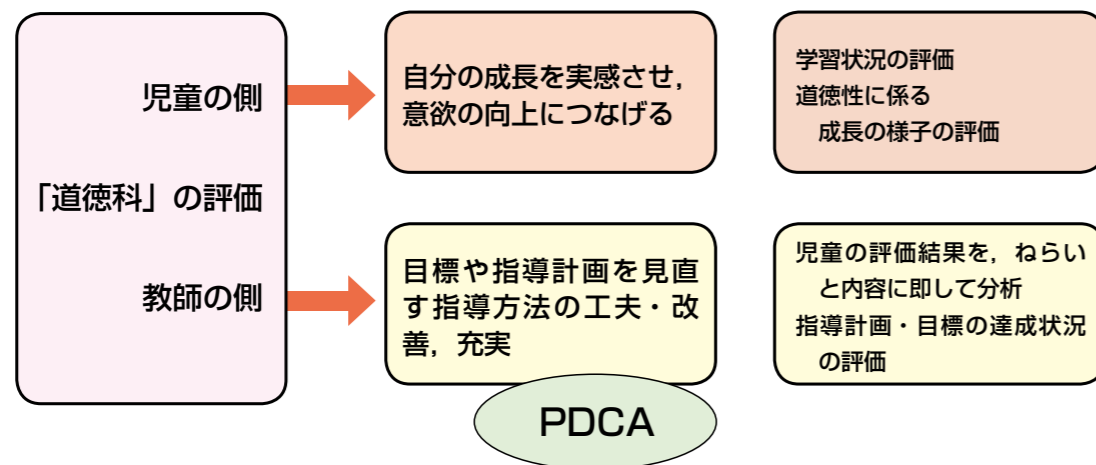
「特別の教科 道徳」の評価 実践編

「道徳科」の評価の在り方

専門家会議の報告では、「道徳科」（授業）で行う評価について、教師の構えともいえる六つの留意点が提起されました。

- ①「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（＝学びに向かう力、人間性等の資質・能力）」に深く関わろうとしているかを見取る。
- ②目標とする資質・能力の多様な側面を分節し、観点別評価を通じて見取ろうとすることは妥当でない。
- ③学習活動全体を通して見取ることが求められる。
- ④内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とする。
- ⑤比較による評価ではなく、成長を積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行うこと。
- ⑥学習活動において多面的・多角的な見方に発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか、といった点を重視する。

また、評価には、児童の側から見た評価と、教師の側から見た評価の二面があります。それぞれのねらいとターゲットは以下のとおりです。



学習評価は、大きく二つのタイプに分けられます。

◆個人内評価

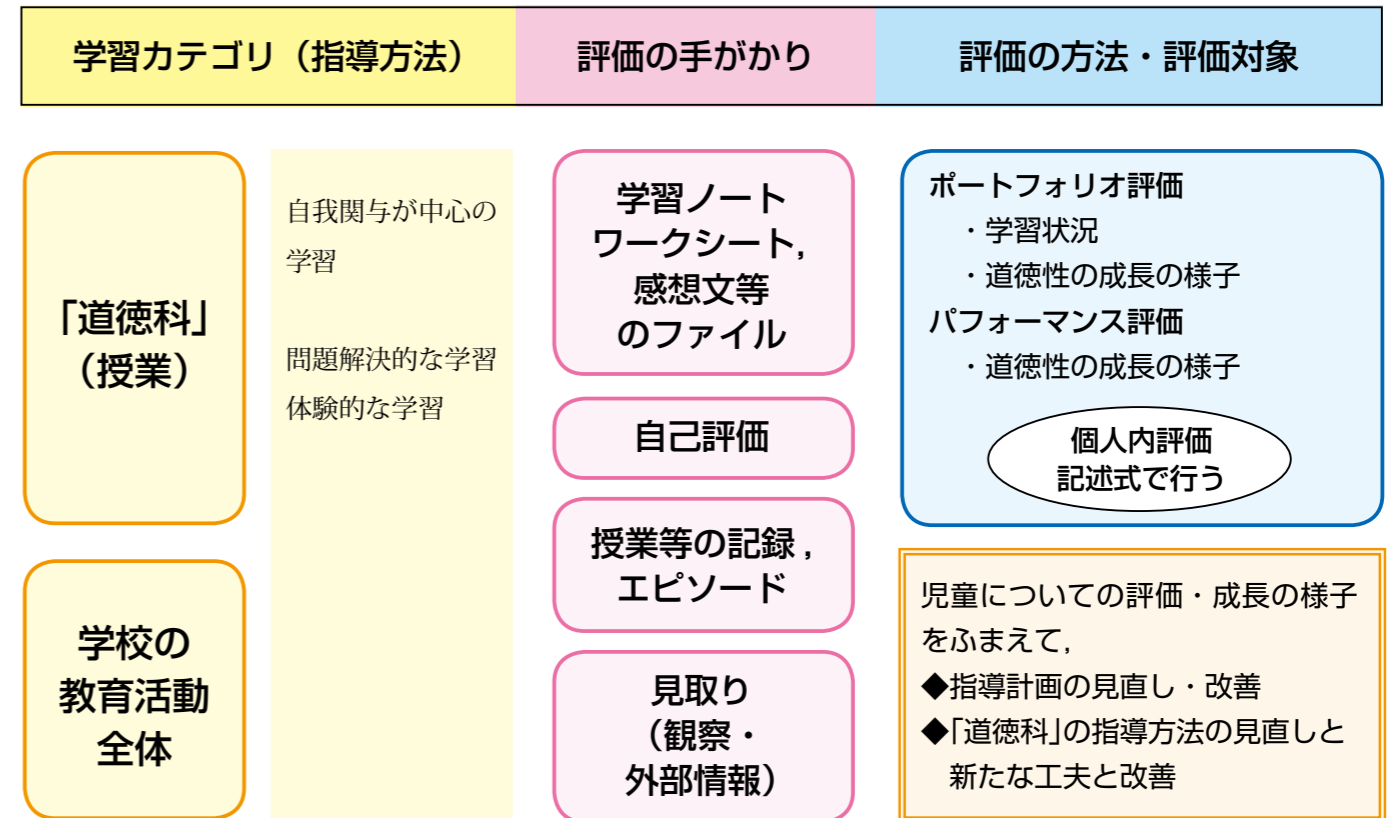
他者との比較や集団内での位置を評価するのではなく、児童一人一人の変化や成長の様子を見取る。道徳では数値の評価でなく、児童の様子を端的な文章で記述する。また、学習によって変容していく個人の実状を、学習内容の進展に合わせ、段階的に評価を継続し進歩の様子を見取る形成的評価もある。

◆包括的・総合的評価

特定の側面に限定したり細分化したりして評価するのではなく、多面的な見取りを通して得られた児童の全人的な特徴から評価する。

道徳では内容項目などを観点とした評価でなく、当該児童の特徴として表れた変化を記述する「大きくくりな」評価を行う。

道徳の評価と指導方法の全体像



特別支援教育における道徳の評価

近年では、発達障がい種別や特性に関する研究が進み、従来は気づけなかった障がいのある児童の様子が理解できるようになってきました。100人のうち6～7人程度に何らかの障がいがあるようになってきました。同時に、障がいの特性や程度には一人一人に違いがあり、それぞれに応じた配慮が道徳指導上も求められています。それぞれに得意と苦手があることをよく理解した準備が必要です。

報告では、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、自閉症の三つが取り上げられていますが、実際は、児童一人一人の状態から正確に理解する努力が求められます。例示されていることでは、「聞く・話す」は得意でも「読む・書く」が苦手な場合があります。通常の道徳授業では読んだり（黙読したり）ワークシートに書いたりしますが、それができないからといって単純に評価を悪くしては、その児童の意欲の向上は望めません。読みは朗読により、記録としては児童が話したことを教師がノートに書き止める等を通して心の内を確認する配慮が必要です。

障がいの特性や程度は個性なので、教師の一般的な認識で決めつけない、児童の実態から学ぶ発想が必要であり、それは全ての児童に対する教師の構えと変わりません。他の児童も友達の「違い」が尊重できるように、学級の雰囲気づくりの面でもユニバーサルな視点が重要です。

評価手法について

ここでは、教育活動で活用可能な評価の手法について、特に、道徳教育に係る評価等について検討される中で採り上げられたものを中心にまとめました。

◆ポートフォリオ評価

一年間書きためた“道徳学習ノート”や感想文・作文、ワークシートなどの蓄積物（ポートフォリオ）から、児童一人一人の学習状況や道徳性の成長の様子を見取る。

※自己評価……「道徳科」においては、一時間の授業を通じて児童が印象に残ったことや考えたことを率直に記録として残す。蓄積された自己評価の記録は、本人の成長の振り返りに役立つポートフォリオとなる。自己評価などにおいては、アンケート式や印象点（数値や記号）による方法が可能。

◆パフォーマンス評価

一定の課題を設定し、学習の結果、その課題解決に対してどのような状況に至ったかを評価する。問題解決的な学習に向く。

また、解決にどれくらい近づいているかを判断する指標はルーブリックと呼ばれる。

※ルーブリックの設定…課題を解決していると考えられる状態を最終段階とし、そこに至るまでの道筋を数段階に分けて設定する。児童の実態が、課題に対しそれぞれどういう段階あるかがルーブリックから選択できるので、「達成度評価」の側面もある。ただし、課題解決の方法・経緯やあり方が道徳の場合は児童によって千差万別なので、各教科の評価とは異質なものである。

◆エピソードによる評価

児童の行動や発言の様子を日常的に見取った特記事項を、メモや教師のノートにエピソードとして記録し蓄積した結果を分析して評価する。児童一人一人の長所短所が見えやすくなる。

◆多面的に行う評価

限定的な定点観測でなく、様々な場所や時間帯、生活場面で見せる児童の多様な表情に配慮することを重視する。一面的な観察結果や教師の先入観が覆る場合があるので、配慮が必要である。



◆チームで行う評価

道徳の評価は担任を中心に行うが、その確度や信頼を高めるには、複数の人で見取っていくことが重要になる。清掃活動や縦割り学習の場面、休み時間の過ごし方、児童会の活動などは、すべての児童の様子を、学年及び全校の教師が互いに見守りあう。学校外の様子については、保護者や地域住民（学校サポーター等）の方々の協力が欠かせない。それらの情報を交流して担任が集約し、より精度の高い評価に役立てる。

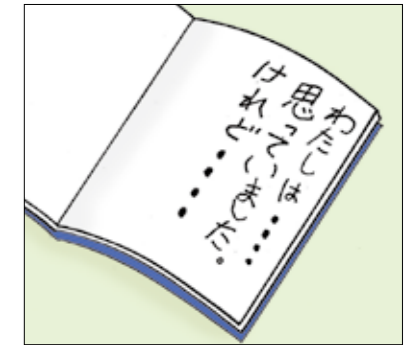
効果的な道徳の評価ツール

道徳の評価が記述によるものとされたことにより、その根拠となる記録を備えることが必須となりました。ひと口にポートフォリオと呼ばれますが、多種多様です。ここでは、従来から用いられることの多かったものを参考に整理してあります。

道徳ノート（道徳用学習ノート）

児童の学習履歴として、活用度の最も高いツールです。次の点に留意すると効果的だと考えられます。

- ①児童にとって、一年間の自身の成長の軌跡が見える内容構成。のちに「あの時の私」を振り返ることができ、自身の成長が実感できるように現在の自分の状態と対照できる内容が望ましい。年間通して利用できるものである。教材に関わる内容より、授業を通して児童の心が受け止めた内容が記述されることを重視したい。教師による「誘導」は、極力少なくする。また、自己評価の欄を設け、授業に対する印象や自分自身の取り組み状況（意欲の側面）が記録として残るようにする。
- ②記述する内容は、往時の自分の問題や関心、授業のテーマについて考えたこと、友達の発言から影響を受けたこと、自分の考えが変わったことや新しく発見したことなどに関する内容が表れることが望ましい。
- ③「道徳科」の授業時間内に記述することを想定してあり、児童の負担感が過重でないもの。



ワークシート

「道徳科」の授業において、教材の内容や登場人物に自我関与させる目的での利用を中心とし、年間のポートフォリオとして、「道徳ノート」とともに活用したいところです。利用目的を逸れないよう、次の点に配慮しましょう。

- ①児童の話し合いを広げ思考を深める中心発問の場面に加え、自分との関わりから考えて記述する内容を含める。
- ②授業の指導過程に応じた構成をとるが、教師対児童の一問一答のように、形式的にならないよう問いかけ方を工夫する。
- ③教材の特徴に応じて問いかけ方を変えるとともに、「絵に描く」、「手紙を書く」形式等、学年の既習内容や発達段階に配慮した工夫をする。

記述を含むアンケート

一定のテーマをもって、児童の意識を調査したり、考え方の傾向を明らかにしたりするために、選択式回答と記述式回答の両方を備えたアンケートを機に応じて行います。選択式回答は統計的な処理（全体に占める割合を求める）に向き、記述式は集団的な傾向と児童個々に固有の意識を見取ることができます。

（教師用） 備忘録ノート

児童の道徳性に係る様子のエピソードを集約する目的で使用します。児童ごとのセルフページを作ったり、見取った場面ごとに区分のある紙面にしたりすれば、一人一人の行動傾向を見出しやすく、その背景の分析にも役立ちます。常に携帯することを重視すれば、小判のノートが有利となります。その場合は、あえて細かな区分は行いません。

そして、これらをエピソードとして蓄積することにより、個々の児童の特性（そのよさと課題）が見えてくるので、児童の努力や成長を励ます材料となります。評価活動の基盤である、教師と児童の人格的に触れ合う機会が増え、共感的な理解が成立しやすくなります。

「道徳科」の見取りについて

さまざまな記録物を活用する評価活動と授業時間中の児童の様子から“見取る”活動は、車の両輪といえます。ここでは、児童の様子の捉え方の一例を具体的に見ることにします。

展開	学習活動 ○発問 *児童の発言 ・補助発問	評価の見取りポイント	評価の表し方
導入	○友達とは、どんなことをして過ごしていますか。 *いっしょに遊ぶ。 *ときどきけんかする。 ・そのときの気持ちには、どんなことがありますか。 *楽しい。 *また、やりたくなる。 *ほっとする。 *友達は大切。		
展開	○今日は、友達とずっと仲よしでいるために大切なことを、みんなで考える時間です。 〔学習課題〕 (1) 「くりのみ」を読み聞かせ、考えるきっかけをつかませる。 ○うさぎときつねは食べ物を探しにいきましたが、それぞれ、どうでしたか。 *きつねはどんぐりを見つけて、たくさん食べた。残りは、隠した。 *うさぎは栗の実を二つだけ見つけた。 ○またうさぎに会ったとき、あなたがきつねなら、どうするでしょう。 その場面を劇にしてみましょう。 〔役割演技〕 うさぎ役から栗の実を差し出されたとき、きつねが何と言うかを、個々の児童が創造的にセリフを考え演技する。 *「何にも ないので、腹ぺこです。」 *「どんぐりが見つかったので、食べました。」「いらない。」 *「……………」 *本当のことを言うか、迷う。 ○きつねとうさぎは友達でしょうか。 *うそをついたから、友達じゃない。 *どっちもお腹がすいていたから、はじめは友達。 ●栗の実をもらったきつねは、どうして涙をこぼしたのでしょうか。 *うさぎさん、ありがとう。うれしい。 *うさぎさんがかわいそう。ごめんね。 ・このあと、きつねはどんなことを思ったでしょう。 *もう、うそはつかない。 *うそがばれなくて、よかった。 ・きつねは、どんな気分でしょう。 *栗をもらっても、気分はよくない。 *はずかしい。 (2) 本時の「学習課題」について考えをまとめる。 ○きつねとうさぎが、ずっと友達を続けるためには、どんなことが大切でしょう。 *どっちも、うさぎみたいになればいい。 *困ったときは、どっちもやさしくする。 *きつねみたいにするをしても反省する。 *友達のことを考える。	教材「くりのみ」(1年) お腹をすかせたうさぎときつねが食べ物を探す。どんぐりを見つけたきつねは、腹いっぱい食べてなお、残りを隠した。 再会したとき、きつねが「何も見つからず、腹ぺこ」と言うと、うさぎはたった二つの栗の実の一つを、おしげもなくきつねに分け与えた。きつねは、涙をポロリと流すのだった。	主題への関心 友情の問題に関心が高い。
		登場人物への共感	友情にまつわる話に関心が高い。
		多面的・多角的な見方への発展	友達の考えに関心を深めて、自分の考えを振り返った。
		多面的・多角的な見方への発展	登場人物の心を多面的に見つめている。
終末	○自分の友達のことを考えて、今日わかったことをノートに書きましょう。	自分との関わりの中での考えの深まり	困っている友達に対して真摯に向き合おうとしている。 友達と助け合う気持ちが高まった。

《学習状況》

「道徳科」授業中における様子を把握するには、「ワークシート」を活用することが効果的と考えられます。教材の登場人物等について自分の考えが記述されているか、ねらいとする道徳的価値を巡って自分の考え方や行動のあり方に言及があるかなどの点に注目します。

児童の特性によるものを除き、何も書けなかったり、教材の内容をなぞるだけだったりでは、学習の深まりの面ではあまりよいとは言えず、児童の努力課題以上に指導方法の改善が求められるでしょう。

また、発言の状況なども評価の対象になりますが、表面的な様子や回数多寡などを単純に評価の対象としない配慮が必要です。発言の内容では、教材の内にあること以上に、自身の体験的な記憶にもとづく内容や個人的な思いが含まれているかがポイントになります。時に、突飛に思えるような児童の発言にも、個人的な経験が隠れている場合があるので慎重な判断が必要です。

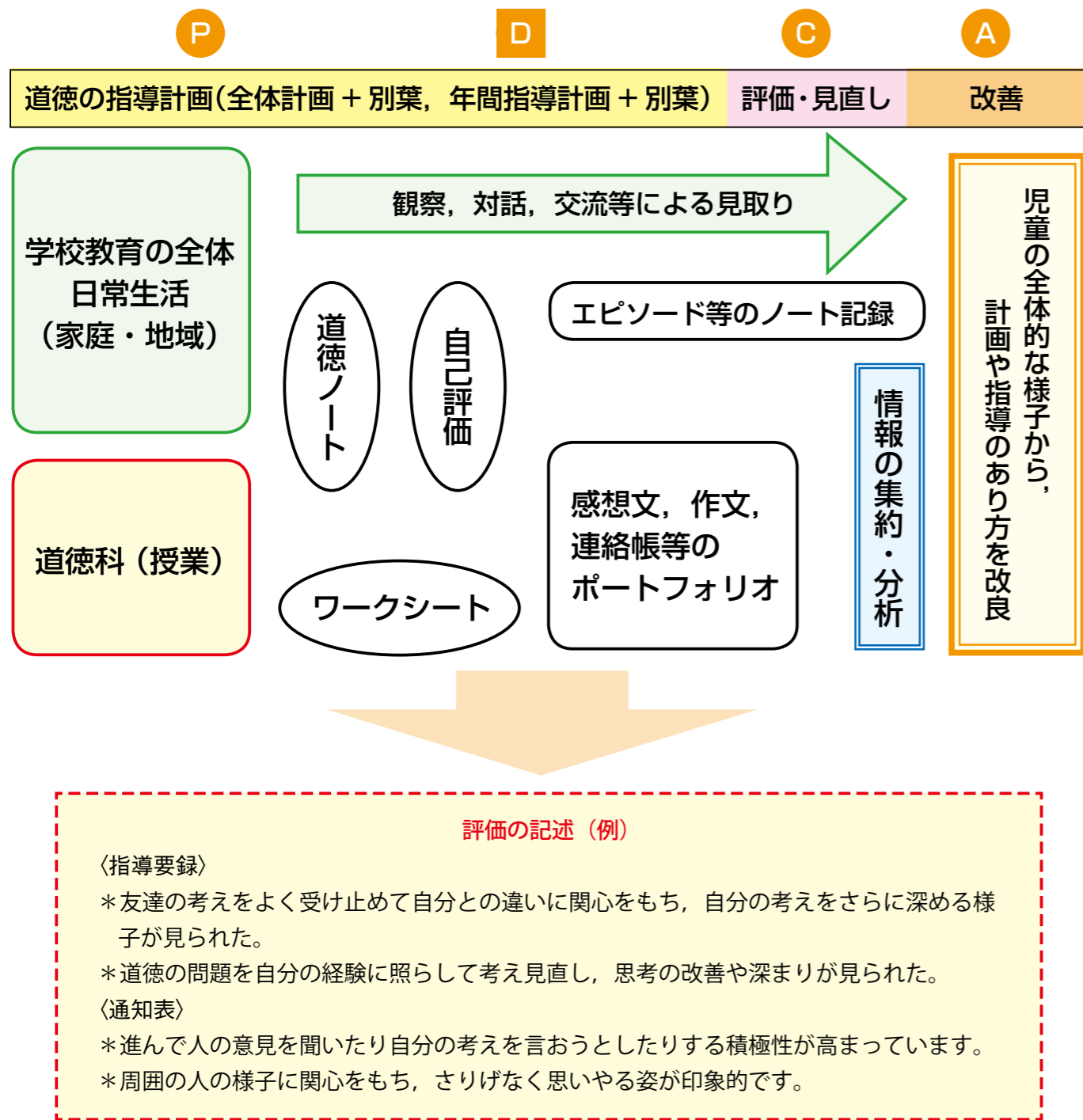
以上から、発言や話し合いの様子に「ワークシート」等の記述内容を合わせて、学習課題に対する真剣さや関心のもち方を総合的に評価することが大切です。

《道徳性に係る成長の様子》

一単位時間で結果が出ることはありませんから、継続的な見守りが必要になります。その活動に向いているのは「道徳ノート」などです。次の点に注目して、道徳性に係る児童の変容を捉えましょう。

- ①学習内容である道徳的価値について、生活場面に即して理解が確かなものになったかどうか。
- ②身の回りに、その価値が関わる問題場面があることを知って、自分の理解を適用しようとしているかどうか。
- ③自分にとって大切であるとの認識をもって、自分の判断や行動に積極的に反映させるようになったか。

道徳教育の評価 年間サイクル（例）



通知表と指導要録の記述の違いについて

現時点で参考例として示されている指導要録の形式では、「特別の教科 道徳」という欄が設けられていますから、「道徳科」（授業）の評価がベースになっています。もちろん、学校の教育活動全体における道徳の評価も大事です。現在、改訂が進んでいる次期学習指導要領で、どのように記述されるかを待ちたいと思います。

それでは、通知表の記述と指導要録の道徳に関する記述は、どう違うのでしょうか。児童と保護者に向けた励ましと努力目標の提示である通知表では、児童のよい点や著しい進歩が認められたことを、児童と保護者ともに励ます温かい筆致で書きましょう。他方で指導要録は、教育活動と児童が在学した記録であり公文書なのでより客観的なものといえます。また、そのよい点や進歩を発見するためには、教育活動全体での“見取り”が大切なバックボーンになることは言うまでもありません。

小学校「道徳科」 評価ブック

発行人 渡邊洋二

編集人 近藤 茂

発行所 株式会社 学研教育みらい

〒141-8416

東京都品川区西五反田 2-11-8

■本書のお問い合わせ先

内容については、TEL (03) 6431-1565 (編集)

それ以外のことは、TEL (03) 6431-1151 (販売)

本書の無断転載、複製、複写 (コピー)、翻訳を禁
じます。

9300006094